

Reading well ー教育大生に贈る本ー

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-04-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00010803

READING WELL

— 教育大生に贈る本 —



Reading Well

— 教育大生に贈る本 —

北海道教育大学附属図書館

巻 頭 言

もし、自分の知人のお子さんが大学に入学したら、その子にどんな本を贈りたいですか？ そんな問いを元にして作られたのが、このブックガイドです。

タイトルの“Reading well”というのは、山崎まどかの『READING WELL is the BEST REVENGE』(DU BOOKS)という本の題名からとったものです。(そもそもこの本の題名自体LIVING WELL is the BEST REVENGEからとったものです。因みに、この本はガーリーをテーマにした書評エッセイ集です。)この本の日本語訳は「優雅な読書が最高の復讐である」というものでした。特に、何かに復讐したいわけではなく、最初の「優雅な読書」という言葉に惹かれたのです。とにかく、ブックガイドというと、いい本があるから読みなさい的な強制的、かつ上から目線、といったものが多く、それがむしろ学生たちを辟易させてしまい逆効果になっている場合があります。そうではなくて、このブックガイドではもっと気楽に自分が面白そうだと思うような本を見つけて欲しい、そんな意味で「優雅な読書」にこだわったわけです。この中から好きな本を選んで、コーヒ一片手にのんびり読んでもらいたいのです。(でも、図書館の本にはくれぐれもコーヒなどこぼさないで下さいね。その本を読みたいと思っている人があなたの後ろに大勢ひかえていることを忘れないで下さい。)

それでは、優雅な読書をお楽しみ下さい。

北海道教育大学附属図書館長

西原 千博

目 次

人文学科

読書の価値(森博嗣)	西原 千博	2
読んでいない本について堂々と語る方法(ピエール・バイヤール)	西村 邦行	3
読んでいない本について堂々と語る方法(ピエール・バイヤール)	大滝 孝治	4
心理学ビジュアル百科(越智啓太)	戸田 まり	5
「わざ」から知る(生田久美子)	中西 紗織	6
グローバル・ヒストリー入門(水島司)	津田 拓郎	7
国民国家と戦争(加藤聖文)	中村 太一	8
国策紙芝居からみる日本の戦争(神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター)	坂本 紀子	9
バイユーの綴織を読む(鶴島博和)	津田 拓郎	10
景観生態学(横山秀司)	村上健太郎	11
心に届く日本語(重松清ほか)	内藤 一志	12
もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら(岩崎夏海)	芝木 美沙子	13
ブラチナタウン(楡周平)	竹内 康浩	14
海辺のカフカ(村上春樹)	菊野 雅之	15
太宰治の辞書(北村薫)	西原 千博	16
青の数学(王城タ紀)	後藤 俊一	17
まっぶたつの子爵(イタロ・カルヴィーノ)	西村 邦行	18

社会科学

気流の鳴る音(真木悠介)	前田 和司	20
家(チベ)の歴史を書く(朴沙羅)	宮前 耕史	21
[図解] 問題解決入門(佐藤允一)	渡部 基	22
友だち幻想(菅野仁)	森 健一郎	23
これからの学校教育を語ろうじゃないか(諸富祥彦)	益子 洋人	24
学力幻想(小玉重夫)	稲井 智義	25
子ども親のグローバル・ヒストリー(村知稔三ほか)	稲井 智義	26
教育社会とジェンダー(河野銀子ほか)	木村 育恵	27

アラスカと北海道のへき地教育(川前あゆみほか)	玉井 康之	28
現代の教育課題と教育経営(日本教育経営学会)	玉井 康之	29
「授業研究」を創る(鹿毛雅治ほか)	池田 考司	30
実践 地域を探究する学習活動の方法(内山隆ほか)	玉井 康之	31
算数・数学教育と数学的な考え方(中島健三)	早勢 裕明	32
創造的人間形成のために(鬼丸吉弘)	阿部 宏行	33
幼児期における運動発達と運動遊びの指導(杉原隆ほか)	奥田 知靖	34
日本語授業の進め方 生中継(金子史朗)	佐藤 香織	35
光とともに…(戸部けいこ)	芝木美沙子	36

自然科学

かけ算には順序があるのか(高橋誠)	後藤 俊一	38
高木貞治とその時代(高瀬正仁)	後藤 俊一	39
僕たちは、宇宙のことぜんぜんわからない(ジョージ・チャムほか)	阿部 修	40
津波ものがたり(山下文男)	田中 邦明	41
たたかう植物(稲垣栄洋)	出口 哲久	42
虫はなぜガラス窓を歩けるのか?(石井象二郎)	木村 賢一	43
太陽電池とLEDの原理(A・キタイ)	松浦 俊彦	44
誤解だらけの遺伝子組み換え作物(小島正美)	出口 哲久	45

芸 術

Japan Fluxus(Luciana Galliano)	松永加也子	47
児童画のロゴス(鬼丸吉弘)	阿部 宏行	48
成功する音楽家の新習慣(ジェラルド・クリックスティン)	服部 麻実	49
オーケストラは未来をつくる(潮博恵)	宇田川耕一	50
芸の心(野村四郎ほか)	中西 紗織	51
世阿弥の稽古哲学(西平直)	中西 紗織	52

人文科学

本を読むのが遅い人に

『読書の価値』

森 博嗣 (著)

出版社：NHK出版／出版年：2018年／ISBN：9784140885475



推薦者

西原 千博 (にしはら ちひろ) 副学長・附属図書館長／教授

作者の森博嗣氏は工学博士で某国立大学工学部の助教授だった人ですが、300冊以上の本を出版しています。そういう人の読書についての本といえば、どれだけ子供の時に本を読んだのかという話かと思いきや、実は読書嫌いだった。40歳を過ぎて、老眼鏡をかけるようになって、やっとその原因に気付いた。実は、子供の時から遠視だったのです(視力測定では近視ばかりがチェックされて、遠視は見逃されてしまう)。おかげで、教科書や本の文字が見えづらい。小説を1冊読むのに一ヶ月もか

かってしまう。でも、諦めずに1冊を読み切る。本は早く読めばいいというわけではないのです。自分が納得するように読めばいいのです。しかも、それで作家になれるのですから。

この本には読書について、森氏のかなり個性的な意見が書かれています。すべてをそのまま受け入れる必要はありません。批判的に読むのも読書には必要です(特に、新書の場合は)。とはいえ、自分の考えを直截に述べていることが、この本の一番の魅力でもあるのですけれど。

「読む」とはどういうことだろう

『読んでいない本について 堂々と語る方法』

ピエール・バイヤール（著） 大浦 康介（訳）
ちくま学芸文庫

出版社：筑摩書房／出版年：2016年／ISBN：9784480097576



推薦者

西村 邦行（にしむら くにゆき） 旭川校 社会科教育専攻／准教授

本を読むのはいいことだと、よく言われます。この推薦図書の企画も、そういう前提に立ったものでしょう。しかし、では、分厚い本を端から端まで目を通すのがエライのでしょうか。そうではないはずです。私たちは、何をもって、ある本を読んだと言えるのか。そのとき、いったい何を不得い

るのか。不真面目に聞こえるタイトルですが、読むとは何か、理解するとは何かを考えるうえで、示唆に富む良書です。掲げている書誌情報は文庫版のものですが、大学の図書館には2008年に出た単行本の版が所蔵されています。

ちゃんと読んだ本について きちんと語る方法

『読んでいない本について 堂々と語る方法』

ピエール・バイヤール（著） 大浦 康介（訳）
ちくま学芸文庫

出版社：筑摩書房／出版年：2016年／ISBN：9784480097576



推薦者

大滝 孝治（おおたき こうじ）釧路校 学校カリキュラム開発専攻／特任講師

「本を読んだ」という状態にもいろいろあり、その状態ごとにそれなりに言えることがある。それもうまくやれば、全然読んでいなくてもかなりよさげなことが言える。ちょっと信じがたいかもしれませんが、確かにそういう方法があります。便利そうなテクニックですね（特に卒論執筆のときとか）。しかし本当に重要なのは、ちゃんと本

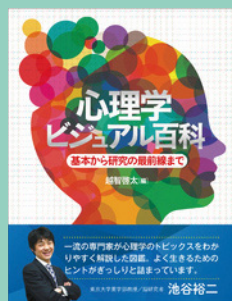
を読んで、「読んだからこそ語れる大切なこと」を、きちんと語ることです。玄人には下手なbluffはすぐにわかります。実はそういう怖い(?)ことが行間に書いてある本なのです。本書の方法を「一周回って」使ってください。（結構前に読んだきりの本なので、中身はそこそそ忘れています。本書の方法の応用!）

きみは人のこころをどう見るか

『心理学ビジュアル百科 — 基本から研究の最前線まで』

越智 啓太（編）

出版社：創元社／出版年：2016年／ISBN：9784422116228



推薦者

戸田 まり（とだ まり） 札幌校 学校教育専攻／教授

心にまつわる最新の知見が見開き1ページずつにまとめられている図鑑のような本です。図書館でパラパラと好きなところから読んでみるのがお勧め。心理学は隣接

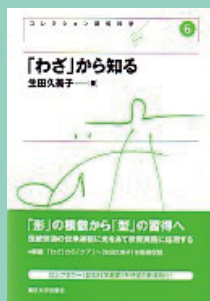
領域が多く、脳、遺伝子から認識、人間関係、犯罪まで、幅広いトピックスが楽しめます。

日本の伝統芸道における 「わざ」習得の認知プロセスから 新たな知識観、教育観を問い直す

『「わざ」から知る』

生田 久美子 (著)

出版社：東京大学出版会／出版年：2007年／ISBN：9784130151566



推薦者

中西 紗織 (なかにし さおり) 釧路校 学校カリキュラム開発専攻／准教授

子ども(学習者)が何かを「わかる」・「できる」ようになるとはどういうことか。そのことの意味やそのプロセスで起こっていることを理解したい人に薦めたい一冊。著者の生田氏は、日本の伝統芸道における「わざ」習得のプロセスに着目し、そこに現代の教育的状況には無い、人間の教育に重要な教育的価値を見出し、新たな知識観を明らかにしようとしている。その文脈においては、子どもがひとりでパジャマを着ることができるようになることも論理的に捉えることができる。

従来は優先的に身体技術、技能の問題として取り扱われ、「わざ」の世界の部外者にとっては神秘的プロセスとして扱われてき

た「わざ」習得のプロセスを、学習者の認知的プロセスに光をあて解き明かしていることが本書の意義といえるだろう。また、「わざ」習得の認知プロセスの構造を「守・破・離」や「三人の自分」という段階とも組み合わせ、世阿弥の言葉や教育学・教育哲学からの概念・用語を用いながら論じ、見える化(図式化)していることも大変興味深い。

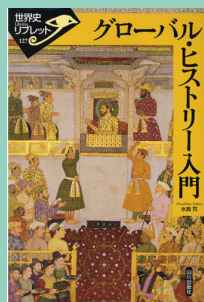
この新装版(初版は1987年出版)では、最後に新たに『「わざ」から『ケア』へ』という解題が加わり、ケアリング論と「わざ」の教授・習得との連関において、師匠(教える者)、弟子(学ぶ者)、仲間との教育的関係が論じられ、「知識」をめぐる新たな展望が示されている。

21世紀に求められる 「世界史」とは

『グローバル・ヒストリー入門』

水島 司（著）

出版社：山川出版社／出版年：2010年／ISBN：9784634349650



推薦者

津田 拓郎（つだ たくろう） 旭川校 社会科教育専攻／准教授

「グローバル・ヒストリー」は近年盛り上がりを見せている研究手法であり、時間的・空間的に広い範囲を射程に入れ、一国史的な歴史研究からの脱却、西欧中心主義の相対化、自然科学者との連携を行う点を特徴としていて、様々な形でわれわれの歴史像に革新をもたらしている。「グローバル・ヒストリー」をタイトルに含む書籍は多いが、この分野に関心を持つものがまず手に取るべきものがこの書籍である。本書で紹介されるグローバル・ヒストリー研究からは、西欧が世界をリードするように

なった近代世界のあり方が、必然でもなければ歴史のゴールでもないという見方が現在の歴史学において主流になりつつあることを読み取る事が出来る。一国史からの脱却を目指しつつ、西欧が覇権を握った近代以降のみを対象とすることが決まった高等学校の「歴史総合」の具体的内容はいまだに明らかになっていないが、「歴史総合」必修化を前にした今、社会科教員志望に限らず、全ての教育大生に手にとって欲しい一冊である。

現代社会とその成り立ちを 理解するために

『国民国家と戦争 — 挫折の日本近代史 —』

加藤 聖文（著）

出版社：KADOKAWA／出版年：2017年／ISBN：9784047035850



推薦者

中村 太一（なかむら たいち）釧路校 学校カリキュラム開発専攻／教授

地理・歴史・政治・経済・社会など、社会科を構成する諸分野を学び、教えるためには、近代に成立し現在も世界を規定する基本的なシステム—国民国家とそれによって構成される国際社会の在り方を正確に理解しておく必要があります。本書は、「国家とは?」、「国民とは?」、「民族とは?」、といった基本的な概念を説明したうえで、

日本において国民国家がどのようにして成立し、どのようにして確立してきたかといったことについて、わかりやすく解説してくれています。「なるほど」と思うことが多く見つかると思うので、社会科が好きな人はもちろん、苦手意識を持っている人も是非読んでみてください。

昔、むかし、紙芝居は… 紙芝居が持っている教育効果とは？

『国策紙芝居からみる 日本の戦争』

神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター
「戦時下日本の大衆メディア」研究班
代表・安田 常雄（編著）

出版社：勉誠出版／出版年：2018年／ISBN：9784585270447



推薦者

坂本 紀子（さかもと のりこ） 函館校 地域教育専攻／教授

現在、幼稚園や保育施設、図書館などで子どもたち向けに活用されている紙芝居は、戦前、人びとを戦争に駆り立てるプロパガンダ（宣伝活動）の役割を担い、国策紙芝居として利用された時期があった。戦時下における国策紙芝居の対象は子どもたちだけでなく、その7割は、成人だったという。幼稚園や学校、会社や工場、街頭、役場などで上演された。

国策紙芝居の多くが、敗戦後、廃棄、焼却されている。本書は、神奈川大学非文字資料センターが購入し、収蔵している国策紙芝居を紹介するものである。子ども向けの昔話から戦時下に掲げられたスローガン

を強調するような内容のものまで、様々な作品が掲載されている。作品の図像が載せてあり、その「あらすじ」と「解題」を付けた「Ⅰ 解題篇」と、「Ⅱ 論考篇」、そして全国に残されている国策紙芝居の「Ⅲ データ篇」で構成されている。

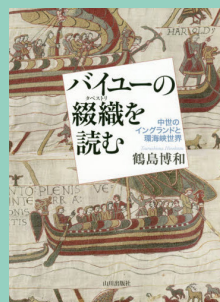
「短時間で絶大な効果をもたらす」といわれ活用された当時の紙芝居をみることによって、日本の戦時下における大衆文化構造の特質を知ることができる。そして、紙芝居が子どもたちや人びとにもたらす教育効果について、あらためて考えさせられる図書である。

同時代の挿絵と史料で読む 中世ヨーロッパの世界

『バイユーの綴織を読む — 中世のイングランドと環海峡世界 —』

鶴島 博和 (著)

出版社：山川出版社／出版年：2015年／ISBN：9784634640726



推薦者

津田 拓郎 (つだ たくろう) 旭川校 社会科教育専攻／准教授

バイユーの綴織とは、フランスのノルマンディー公ウィリアムが海を渡ってイングランド王位を獲得した、1066年のいわゆるノルマン＝コンクエストの様子を織り込んだ一大歴史絵巻である。中世ヨーロッパからこれほど大部の図像史料が残っていること自体が奇蹟に近いが、本書はその全てをカラーで収録する、大変贅沢な作りとなっている。綴織のそれぞれの場面場面について、複数の文字史料の邦訳とその解説が付されているため、世界史教科書では3

行足らずの記述に過ぎないノルマン＝コンクエストの具体的な展開を、読者は史料と図像に即して知ることが出来る。類書の少ない「史料に語らせる」スタイルの書籍であり、中世ヨーロッパに関心を持つ全ての人に強くお勧めしたい。なお、一般読者にはなじみのない人物や歴史史料が多いため、メモを取りながら読むことを推奨する。著者と綴織との「長い格闘」を描いた「謝辞」も必読。

人生を動かすような本に 出会ってほしい

『景観生態学』

横山 秀司（著）

出版社：古今書院／出版年：1995年／ISBN：9784772216487



推薦者

村上 健太郎（むらかみ けんたろう） 函館校 地域協働専攻／准教授

著者の横山秀司さんは地理学者でドイツが起源の景観生態学(Landscape Ecology)の考え方をいち早く日本に紹介した研究者です。この本には、景観生態学の考え方が丁寧に書かれています。

この本を初めて手に取ってくれた人には、「なんだ、ただの教科書じゃないか」と言われそうです。しかし、個人的な事情ですが、大学の時にこの本に出会わなかったら、また「景観生態学」という言葉を知る機会がなかったら研究者をやっていなかったかもしれないと思っています。

学生の皆さんの中には大学入学までの道のりで、いろんな学問を「やらされてきた」と思っている人が多いかもしれません。しかし、大学に入ってからでは自分でやりたい学問を選ぶことができます。自分が取り組んで、「楽しい」と思える学問に出会ってほしいと思います。

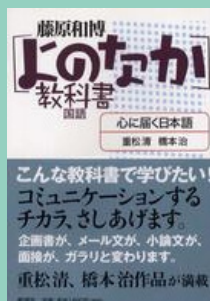
自分が好きな学問って何だろう？それをどうやったら知ることができるだろう？図書館の本というのも一つのツールではないでしょうか。

「国語」の先生を目指す人、 大学生の国語力が欲しい人へ

『心に届く日本語 [よのなか]教科書：国語』

重松 清、長藺 安浩、橋本 治、藤原 和博（著）

出版社：新潮社／出版年：2003年／ISBN：9784104202041



推薦者

内藤 一志（ないとう かずし） 函館校 地域教育専攻／教授

今後の「国語科」は情報処理力や思考力を育てることが大きな目標となっている。本書は10年以上も前の出版だが、現在でも示唆に富んでいる。

目次を見ると

「表現法」をトレーニングする、「思考法」をトレーニングする、日本語の文章はこうして生まれた、「わからなさ」についてといった感じ。

中学生を対象にした授業を想定して書

かれているが、中身はちょっと難しい。高校卒業段階で持っていて欲しい国語力を育てようとしているように見える。なので、私は一時期この本を函館校のアカデミックスキルで使っていた。

「よのなか」とは著者のひとり藤原和博が中心となって取り組んでいる教育プログラムのことだ。図書館のOPACで「よのなか」と入力すれば、国語科以外でも魅力的な本が何冊もヒットする。

家庭、学校、会社、NPO… ひとがあつまっているすべての組織で 役立つ本（本書の帯より）

『もし高校野球の女子マネージャーが ドラッカーの『マネジメント』を読んだら』

岩崎 夏海（著）

出版社：ダイヤモンド社／出版年：2009年／ISBN：9784478012031



推薦者

芝木 美沙子（しばき みさこ） 旭川校 生活・技術教育専攻／教授

野球部の新人マネージャーがドラッカーの「マネジメント」を読んで、甲子園を目指す物語で、「もしドラ」と言われ、映画にもなった本です。話題になっているので、興味本位で手に取った本でしたが、読んでみると、とても面白く、一気に読んでしまいました。主人公が、マネージャー（世話人）

とマネジメント（経営者）を勘違いして始まる物語ですが、ドラッカーの経済理論により、その差が不思議となくなっていくます。ドラッカーの様々な理論を野球部の運営に活かして野球部を強くする物語です。困難と思える物事に対処する時のヒントが、たくさん詰まっている本です。

ユートピアは創るもの！

『プラチナタウン』

楡 周平（著）

祥伝社文庫

出版社：祥伝社／出版年：2011年／ISBN：9784396336899



推薦者

竹内 康浩（たけうち やすひろ） 釧路校 学校カリキュラム開発専攻／教授

出世街道を外された総合商社部長が、ひょんなことから膨大な負債を抱えた田舎の町長になってしまいます。さあ、彼はどうやって難局を乗り切るか、という物語。単なる娯楽経済小説にとどまらず、現代日本が抱える多くの問題をいかに解決するかという一つの処方箋を提示したものでもあり、また目的に向かって努力する人々の姿を描く感動作でもあります。舞台は東北、宮城県の架空の町。実はこの小説は東日本大震災の前のもののなのですね。そうい

う意味では、さらに大きな問題を背負ってしまった東北のこれからの復興に向けた、試験のような本だとも言えましょう。また、設定は行政や会社だけでなく、あらゆる組織の立て直しについてもあてはまると言えそうですね。空想ではなく、実現可能な基礎の上に希望を描き未来を創ろう、そんな励ましにも思えます。なお、本作は2012年に大泉洋の主演でドラマ化されています（筆者未見）が、個人的にはイメージが違うなあ。

タフでなければ生きていけない

『海辺のカフカ』

村上 春樹（著）

新潮文庫

出版社：新潮社／出版年：2005年

ISBN：[上] 9784101001548

ISBN：[下] 9784101001555



推薦者

菊野 雅之（きくの まさゆき） 釧路校 学校カリキュラム開発専攻／准教授

日々の日常にも、世界にも邪悪なものはたしかに存在します。傲慢、怠慢、無知、独善、不誠実、不公平、無責任、身勝手、非寛容、理不尽。みなさんもそんな邪悪な何かに直面して憤慨したり、いたたまれない気持ちになったりしたことがあると思います。それらの邪悪なものを許せず、戦い、みなさん自身の心身が損なわれたこともあるのかもしれませんが。私自身もそういった邪悪なものを許せず、対峙し、結果自身の心身のバランスを崩してしまったこともあります。邪悪なものに正対するのは、本当に必要な時はあるとは思いますが、一方で、

その全てに正対することはリスクのある行為だと言えます。では、どうするのか。私は「タフでなければ生きてはいけない」というアメリカの作家、レイモンド・チャンドラーの言葉がその指針を示してくれていると考えています。そして、今回お勧めする『海辺のカフカ』にもそのヒントが描かれています。「世界で一番タフな15歳」になるべく旅をするカフカ少年の冒険譚。我々はタフでなければ生きていけません。タフであることはどういうことか。タフであるためにはどうしていけばよいのか。本書にその答えがあります。

謎解きと研究と

『太宰治の辞書』

北村 薫（著）

創元推理文庫

出版社：東京創元社／出版年：2017年／ISBN：9784488413071



推薦者

西原 千博（にしはら ちひろ） 副学長・附属図書館長／教授

春桜亭円紫が登場する<円紫さんと私>シリーズの一作。今回は太宰治の『女生徒』をめぐる謎探し。この作品の中に「ロココという言葉を、こないだ辞典でしらべてみたら、」とある、この「辞典」とは何か。いや、これは太宰の創作ではないか。そもそも、太宰はどんな辞書を持っていたのか。それを探して国会図書館から群馬県立図書館へ。さらに、この作品が発表された時点で太宰が見ることのできた辞書で確認しなければならない。国語とは限らない美術の辞

典かもしれない。その当時の辞書を探しては片端から「ロココ」をひいてみる。

実は、これは研究の基本とまったく同じです。自分で疑問を見つけ、それについて納得するまで調査するということです。（面白くて、ためになるということです。）

さて、辞書は見つかったのか。それは読んでのお楽しみ、ということです。このシリーズはどの作品にも面白い謎が登場するので、他の作品も読んでみて下さい。

数学で決闘！

『青の数学』 『青の数学2』

王城 夕紀（著）

新潮文庫

出版社：新潮社／出版年：2016年

ISBN：[1] 9784101800721

ISBN：[2] 9784101800820



推薦者

後藤 俊一（ごとう しゅんいち） 札幌校 理数教育専攻／准教授

数学は英語でmathematicsといい、語源をだると「学ぶべきこと」を意味する言葉になるそうです。

本書では、数学好きの高校生たちが「決闘」で難問を解く腕を競い合いながら、「数学とは何か？」に思い悩む姿が描かれます。

数学の「決闘」など、荒唐無稽に感じるかもしれませんが、16世紀には実際に行

われていて、三次方程式の解法をめぐって争われたカルダーノとタルタリアの逸話は有名です。

数学を題材にした物語作品はあまり多くありませんが、モーニングに連載中で小学生を主人公にした「はじめアルゴリズム」（三原和人著、講談社）にも、真剣に数学と向き合う人々の姿が描かれています。

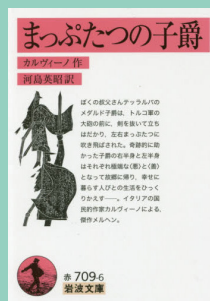
世のなかはどうにも曖昧なもの

『まっぷたつの子爵』

イタロ・カルヴィーノ（作） 河島 英昭（訳）

岩波文庫

出版社：岩波書店／出版年：2017年／ISBN：9784003270967



推薦者

西村 邦行（にしむら くにゆき） 旭川校 社会科教育専攻／准教授

善の部分と悪の部分とに分かれ、二人の別々の人間になってしまった、ある子爵をめぐる童話。親でも教師でも、「悪いこと」をしない「善い子」を育てたいという人は少なくないでしょう。しかし、その想いはひょっとすると、現実の世界では実現し

がたいものであって、その子の人生を難しいものにすらしめてしまうのかもしれません。教育に引きつけて読めば、そんなことも考えられる一冊。著者は20世紀のイタリアを代表する作家で、他にも大半の作品が日本語に翻訳されています。

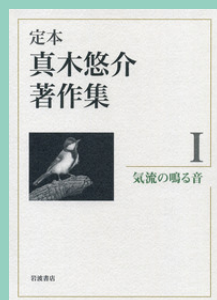
社会科学

土着の思想に触発される

『気流の鳴る音』

真木 悠介（著）

出版社：岩波書店／出版年：2012年／ISBN：9784000284912



推薦者

前田 和司（まえた かずし） 岩見沢校 スポーツ文化専攻／教授

私が大学院生の頃に会った一冊です。現代社会が直面している人と人、人と自然の関係性をめぐる問題の原因を、近代以降に世界を覆いつくした市民社会が自明の前提にしている諸感覚に求め、それらを土着の思想の生き方の魅力を提示することで「つぎつぎとつきくずす」、1970年代を代表する名著です。10数年前、人と社会と自然の関係をより良いものにしていくというアウトドア・ライフコースを岩見沢校に新たに構想するに当たって、その哲学的ベースのひとつになった論稿です。人類学者カルロス・カスタネダのメキシコ・ヤキインディ

オの呪術師の世界を描いた一連の著作の解説を軸に、人と人、人と自然の閉塞した関係性が逆照射されていきます。とりわけ、「序『共同体』のかなたへ」は、先住民族の土着の詩を通じて、彼らの自然に対する感応の深さやゆたかさが表現され、一方で市民社会に生きる我々がどれほどそれらを喪ってしまっているかが突きつけられます。また「彩色の精神と脱色の精神」では、支配の欲求、出会いへの欲求という、我々が人や物事とかかわるときの関係性を決定づける意識について独特な言葉が与えられ、イマジネーションに触発されていきます。

身近な人の歴史を知り、 自分の生き方を考える

『^{チベ}家の歴史を書く』

朴 沙羅（著）

出版社：筑摩書房／出版年：2018年／ISBN：9784480818485



推薦者

宮前 耕史（みやまえ やすふみ）釧路校 地域・環境教育開発専攻／准教授

「歴史を書く」ってどのような行為なのでしょう？「日本の歴史」「世界の歴史」「〇〇国の歴史」「〇〇市の歴史」「〇〇村の歴史」…。でも「歴史」って国や地域にしかないのでしょうか？一方、「歴史を書く」（＝「歴史をつくる」）のは誰でしょう？それは「歴史家」にしか許されていない行為なのでしょうか？

いえいえ、どこにでも誰にでも、歴史はあります。あなたのお父さんにも、お母さんにも、おじいちゃん、おばあちゃんにも、となりの家のおじさん、おばさんにも、あ

なたの友だちや、あなた自身にも。そして「歴史を書く」（＝「歴史をつくる」）ことは誰にでも開かれています。

自分の最も身近な人々＝家族へのインタビュー（聞き書き）を通じ、筆者は「（自分の）家の歴史」（生活史）を描き出します。そしてそれが、「地域の歴史」「国の歴史」「世界の歴史」とつながっていることを確認します。「人を知る」ことは「自分を知る」こと、「歴史を知る」ことは、「自分の生き方を考える」ことでもあるのです。

指導教員から 「あなたの話はわからない」と 言われたときに読む本

『新版[図解] 問題解決入門 —問題のを見つけ方と手の打ち方—』

佐藤 允一（著）

出版社：ダイヤモンド社／出版年：2003年／ISBN：9784478750063



推薦者

渡部 基（わたなべ もと一） 札幌校 養護教育専攻／教授

30年以上前のことですが、学生として研究指導を受けているとき、熱弁もふるわず、自分でも何を言っているのかがわからなくなり、指導教員をいつも困らせていました。「絶対に問題だ!」と感情が先行してしまい、問題自体をきちんと組み立てることができず、感じるハートと考えるマインドのバランスが崩れていたのです。そんな問題を解決していく力の無さに悩み続けたある日、この本の初版に出会いました。この本は、解決すべき問題の構造を論理的に

解明し、可能な限り、幅広く対策を考えようとするものです。教員のみならず、問題を解決していく力は誰にとっても大切で、考えるマインドの中核になります。今では、読みやすくなった新版とその電子版もあります。この本を読んだあとに、指導教員と話したら、「あなたが言っていることはわかる…が、そんなことはできるのか」くらいは言ってもらえるかもしれない…けれど、責任は持てません…m(_ _)m

自分のために、 そして将来向かい合う 子ども達のために

『友だち幻想』

— 人と人の <つながり> を考える —

菅野 仁（著）

ちくまプリマー新書

出版社：筑摩書房／出版年：2008年／ISBN：9784480687807



推薦者

森 健一郎（もり けんいちろう） 高度教職実践専攻（釧路）／准教授

テレビ番組「世界一受けたい授業」で芸人&直木賞作家の又吉直樹さんが紹介したことから、一挙に有名になった本です。ここで私から紹介するのもどうかとも思ったのですが、「友だち」についての新しい見方を与えてくれるこの本は、将来教員になる皆さんには、非常に良い刺激になると思い書かせていただきました。

大人の世界はもちろん、今、学校現場で起こっている様々な悩みやトラブルも、突き詰めると人間関係というものに行き着くと思います。また、皆さんが在学中に行

う教育実習やフィールド研究などにおいても、結局のところ、教育活動を通して人間関係をいかにつくるかということが問われているのだと思います。学校現場では、自分の経験や考えを重視するあまり、「こうあるべき」といった先入観で動いてしまい、かえって事態を悪化させてしまうことも少なくありません。将来教員になる皆さん自身、そして皆さんと過ごすことになる子ども達のために、きっとヒントを与えてくれる本だと思います。

学校の諸活動をまとめ、 整理する試み

『これからの学校教育を 語ろうじゃないか』

— 学校における人格形成と育てたい資質・能力 —

諸富 祥彦（編著）

出版社：図書文化／出版年：2015年／ISBN：9784810056556



推薦者

益子 洋人（ましこ ひろひと） 札幌校 学校教育専攻／准教授

本書は、編著者である諸富祥彦先生と、学校教育の諸分野・領域（生徒指導、キャリア教育、教育相談、道德教育、総合学習、特別活動、そして教科教育など）の第一人者との対談の記録をまとめたものである。いま、学校における上記のような諸活動は、「一見みな同じようなことをやっているように見えるしやっているように見える」にもかかわらず、「それぞれ自分の殻に閉じこもったままで、お互いにほとんど交流し

ていない」これが、学校における多忙感や混乱につながっていると、編著者は言う。そこで編著者は、本書を通して、全ての分野が暗々裡に「共通してめざしているもの」を問い直し、学校における人格形成の「統合的な枠組み」の提案を試みている。

学校の多忙感到困惑する人、学校における人格形成に関心のある人、そして、上記の各分野に携わらんとする人に、オススメしたい一冊である。

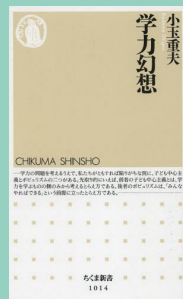
18歳選挙権時代の市民が 公教育の意義を考えるために

『学力幻想』

小玉 重夫 (著)

ちくま新書

出版社：筑摩書房／出版年：2013年／ISBN：9784480067197



推薦者

稲井 智義 (いない ともよし) 旭川校 教育発達専攻／講師

日本の教育論議は、子ども中心主義とポピュリズムという罫を持つ学力幻想に囚われてきた。前者は、子どものみの視点から教育について考える思想に現れる。後者は、「みんなやればできる」のように、人々が家族の不平等に目を向けずに過剰に教育に期待する状況を示す。

著者は学力幻想を打破するために二人の思想を参照する。一つは、全体主義を批判する生涯が映画になった政治学者ハンナ・アレントの公共性である。全体主義は、現在の友達関係や生徒集団が持つ閉鎖性が示すように身近な問題である。もう

一つは、社会学者バジル・バーンステインのペダゴジー論である。著者は、異質な他者同士が出会う空間を教師が創出して子どもに市民性を涵養する、今日の公教育が直面している課題に応答する。教師になるか悩む学生が公教育の意義を考えるために、「教師である前に市民であること」(167頁)と著者による東大教育学部附属中等学校平成27年度卒業式祝辞を贈る。

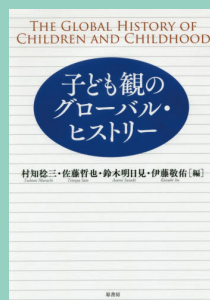
関連推奨図書：映画『ハンナ・アレント』、小玉重夫『難民と市民の間で』、同『教育政治学を拓く』、菅野仁『友だち幻想』、綿矢りさ『蹴りたい背中』、朝井リョウ『桐島、部活やめるってよ』、浦沢直樹『20世紀少年』

「青年は夢とともに生き、 老人は思い出とともに生きる」 (本書の「帯」「はじめに」より)

『子ども観の グローバル・ヒストリー』

村知 稔三、佐藤 哲也、
鈴木 明日見、伊藤 敬佑 (編)

出版社：原書房／出版年：2018年／ISBN：9784562054930



推薦者

稲井 智義 (いない ともよし) 旭川校 教育発達専攻／講師

私を含む著者たちは、子どもに対する大人の価値観を示す子ども観と子どもたちの存在の歴史を、全地球規模の視点から明らかにしようとした。『世界子ども学大事典』(2016年、原著2004年)を監訳した北本正章は、序章「子ども観のグローバル・ヒストリーの研究動向」を執筆する。以下の全14章の題名には、児童文学、絵本、「小さな聴衆」、子どもの権利、子育て、家庭教育、奴隷、マララ・スピーチなどのキーワードがある。中世初期から21世紀初頭

までの時代について、欧米を中心に西インドや日本、中国までが扱われている。本書で扱えていない時代や地域、対象も多い。本書の題名は、これから読者とともに探究したい課題を表している。

読者には関心がある時代や国、キーワードから読み始めてほしい。夢や悩みを持つ若い読者が、「未来社会からの使者」(2頁)である子どもたちへの理解や自らの子ども時代を捉え直す手がかりを、本書から得られることを願っている。

子どもたち一人ひとりを 受け入れ、支え、育む教員になるための 大事な視点を手に入れよう

『新版 教育社会とジェンダー』

河野 銀子、藤田 由美子（編著）

出版社：学文社／出版年：2018年／ISBN：9784762027772



推薦者

木村 育恵（きむら いくえ） 函館校 地域教育専攻／准教授

あなたが教員になった時、目の前でさまざまな教育問題が起こるかもしれない。給食費が払えない子ども、暴力をふるわれている子ども、性的マイノリティであることを隠しながら学校生活を送る子どもなど、教育をめぐるさまざまな課題に遭遇することがあるだろう。

教育をめぐる課題について、その問題の当事者個人に対応することはもちろん重要である。しかし、同種の問題が起こることを防ぐためには、彼ら／彼女らがどのような状況におかれているのか、社会的背景についても捉える必要がある。

本書は、子どもたちの多様な自己形成に向けた教育や支援のあり方を検討するのに、特に「ジェンダー」という視点から教育社会の問題を捉え直している。性別によって生き方や進路が制限される日本社会においては、性別による決めつけを捉え直す「ジェンダーの視点」は、子どもたち一人ひとりの可能性を伸ばしていくためにとりわけ重要な意味を持つからである。

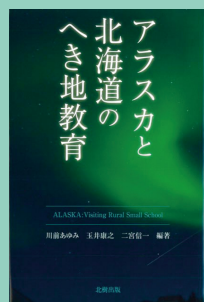
ジェンダーの視点から学校や教育を捉え直すと、教育をめぐるどのような社会的課題がみえてくるだろうか。ぜひ一読していただきたい。

アラスカと北海道の 自然・社会・文化と学校の 共通性が分かる

『アラスカと北海道の へき地教育』

川前 あゆみ、玉井 康之、二宮 信一（編著）

出版社：北樹出版／出版年：2016年／ISBN：9784779304903



推薦者

玉井 康之（たまい やすゆき） 副学長／教授

北海道教育大学とアラスカ大学は、姉妹校協定を結んでいる。それはアラスカの自然・文化と北海道の自然・文化が極めて似ているからである。また北海道の開拓は、アメリカの開拓技術を真似て進められており、社会構造も共通性が強い。このような

北海道とアラスカのへき地教育も共通性があり、そしてそこでの地域の教材化も共通性がある。

このような北海道とアラスカの教育の共通性について、旭川校と釧路校の教員7名で執筆したものである。

現代の教育課題に対する 教育経営の方策が理解できる

『現代の教育課題と教育経営』

日本教育経営学会（編）

出版社：学文社／出版年：2018年／ISBN：9784762028120



推薦者

玉井 康之（たまい やすゆき） 副学長／教授

現職教員や大学院生にとっては、学校経営全体を理解しておく必要がある。現代の教育課題は、カリキュラムマネジメント改革、保護者対応と地域連携、少子化と学校統廃合問題、チーム学校、など様々な課題

が起きている。これらは学校経営の問題としてトータルにとらえなければならない。このような学校課題に対応した教育経営の方策をとらえたもので、これからの中堅リーダーが学ぶべき課題がとらえられている。

一人ひとりの子どもの 学びと成長のための授業研究

『「授業研究」を創る』

— 教師が学びあう学校を実現するために —

鹿毛 雅治、藤本 和久（編著）

出版社：教育出版／出版年：2017年／ISBN：9784316804033



推薦者

池田 考司（いけだ こうじ） 札幌校 言語・社会教育専攻／講師

授業をできるようにするために「指導案づくり」に励んでいる人もいます。

でも、待ってください。授業は、その学校・教室、一人ひとりのこどもの現実と思ひ・特性をもとに行われる営みです。

単なる「指導要領にもとづく指導案通りの授業」という発想から解放されて、子どものための授業とは何かという授業づくりの原点から考えてみる機会をぜひ持ってください。日本の授業研究は教科科目の

枠を超えた学として長い歴史を持っています。授業における個々の子どもの反応や変化を丁寧に記録し、分析し、皆で検討する。そのことが授業の質の向上を実現させてきたのです。

日本教育方法学会第46回大会のラウンドテーブルがきっかけで生まれた、若手中堅研究者の授業研究論から学んでみてください。

地域を探究する学習活動を通して、 「社会に開かれた教育課程」を創造するための 理論と実践を具体的に提案！

『実践 地域を探究する 学習活動の方法 — 社会に開かれた教育課程を創る』

内山 隆、玉井 康之（著）

出版社：東洋館出版社／出版年：2016年／ISBN：9784491032818



推薦者

玉井 康之（たまい やすゆき） 副学長／教授

これから教師を目指す教育大生には、「次世代の学校・地域」創生を通した「社会に開かれた教育課程」の創造とカリキュラムマネジメントが求められています。

「子どもが地域を探究するとは、地域の何を、どのように調べれば良いのか？」「そのための教師の指導のあり方は？」「それは、どのようなカリキュラムに基づいて行われるのか？」「そこで子どもたちに育つ力とは？」

本書は、教育大生がこのような問いを解決し、学校において教育課程編成の主体と

して「社会に開かれた教育課程」を創り、実践、評価、修正・改善していくカリキュラムマネジメントについて、理論と実践を往還させながら学んでいけるように編集されたものです。

なお本書は、釧路校で科目「現代の科学と思想Ⅶb」のテキストとして、講義で学んだことを実際に地域に出て自ら探究し、協働して表現し、学び合いを通して教師としての資質・能力を高めることに活用しています。

新学習指導要領が目指す 算数・数学教育の原点が分かる

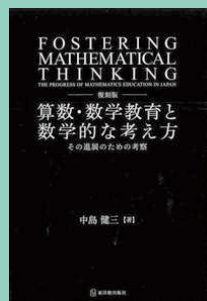
— 統合的・発展的に考察、簡潔・明瞭・的確に表現とは —

『復刻版 算数・数学教育と 数学的な考え方』

— その進展のための考察 —

中島 健三 (著)

出版社：東洋館出版社／出版年：2015年／ISBN：9784491031309



推薦者

早勢 裕明 (はやせ ひろあき) 釧路校 学校カリキュラム開発専攻／教授

平成29年に告示された小・中学校学習指導要領の算数・数学科では、目標に「統合的・発展的に考察」や「簡潔・明瞭・的確に表現」というフレーズが、昭和43年告示の学習指導要領以来に復活している。当時の数学教育現代化運動時代に文部省教科調査官であった著者が、失敗の時代とされた当時の真意を熱く語り、まさに、現代の預言書のような内容である。

著者は昭和33年告示学習指導要領で「数学的な考え方」という言葉を作り出した人物であり、「数学的な考え方の育成とは、端的に言って算数・数学にふさわしい創造的な活動をできるようにすることである」

と述べ、そのための創造的な指導を「どの内容かで、どの学年かで1回やればよいというものではなく、つねにそのような立場に立って学習指導を行うことによって、はじめてその効果が期待できる」と強調する。

「算数・数学で子どもにとって新しい内容を指導しようとする際に、教師が既成のものを一方的に与えるのではなく、子どもが自分で必要を感じ、自らの課題として新しいことを考え出すように、教師が適切な発問や助言を通して仕向け、結果において、どの子どもも、いかにも自分で考え出したかのような感激をもつことができるようにする」…私が理想とする授業像である。

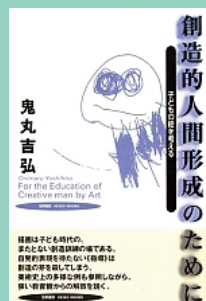
その絵の指導、間違っていないですか?!

— 発達と原理を理解することからはじまる —

『創造的人間形成のために — 子どもの絵を考える』

鬼丸 吉弘 (著)

出版社：勤草書房／出版年：1996年／ISBN：9784326298570



推薦者

阿部 宏行 (あべ ひろゆき) 岩見沢校 美術文化専攻／教授

『創造的人間形成のために』は、保護者も含めた、子どもの成長に関わる人に対して「絵の指導」について、分かりやすい文章で書かれている。その指導に関する一節がある。「あの真剣な姿が示している原本的体験を子どもから奪い去り、代わりに大人の色あせた灰色の世界を押し付けるといことは、何という理不尽な仕打ちでありましょうか。そのようなことをしてよい権利は、私たち大人のどこを探してもないのです。大人の常識を根拠に、子どもの絵の世界に干渉することがどんなに不当なこと

か」と、発達や原理を無視した無謀な指導は、子どもを破壊する以外のなにものでもない」と警鐘を鳴らしている。子どもの絵の表現は、子どもなるが故の必然性の現れであることを理解することから指導が始まるとしている。

亡くなったある札幌の書店の店主は「中学生はこれを読め」という隠れた名著をPRする企画を催した。ここで言いたい。「教員養成系の学生はこれを読め」である。目の覚める「喝!」になる。

全てに通ずる幼児期の運動遊び

『幼児期における 運動発達と運動遊びの指導 —遊びのなかで子どもは育つ—』

杉原 隆、河邊 貴子（編著）

出版社：ミネルヴァ書房／出版年：2014年／ISBN：9784623070220



推薦者

奥田 知靖（おくだ ともやす） 岩見沢校 スポーツ文化専攻／准教授

現代社会において、子どもの年代の活動量の低下は、国内のみならず世界的な課題として認識されている。これまでの研究によって、運動による心身の健康の維持や、認知的能力の開発など運動の効果が多数報告されている。しかし、いくら運

動が重要であったとしても、子どもに運動を無理強いすることはできない。子どもにとって運動は楽しいものでなくてはならない。本書では、遊びとしての運動の重要性や幼児期の運動発達の特徴についてわかりやすくまとめられている。

ベテラン教師が日本語を どう教えているかわかります！

『日本語授業の進め方 生中継』

金子 史朗（著）

出版社：アルク／出版年：2018年／ISBN：9784757430976



推薦者

佐藤 香織（さとう かおり） 函館校 地域協働専攻／講師

日本語を母語としない人に対する、外国語としての日本語の授業が実際にどのように行われているのかをなかなかイメージできない学生さんが多いです。この本は、初級項目のほぼすべてを網羅し、実際にどのように授業が行われているかを分かりやすく解説しています。もちろんこのやり方が全てではありませんが、ベテラン教師がどのように教えているのかを知ることは重要

です。また、いくつかの授業については、実際の授業風景を動画で見ることにも可能になっているので、とてもお得な1冊だと思います。

日本語教育や外国語教育に興味があるすべての学生、地域で日本語を母語としない方々と交流する機会がある学生におすすめです。

マンガを読んで、 自閉症児の「光」とともに 成長しよう！

『光とともに…』

— 自閉症児を抱えて』(全15巻)

戸部 けいこ (著)

出版社：秋田書店／出版年：2001年～2010年

ISBN：[第1巻] 9784253104333



推薦者

芝木 美沙子 (しばき みさこ) 旭川校 生活・技術教育専攻／教授

普通のサラリーマン家庭に生まれた光が自閉症であることがわかり、その子を育てる中での家族の葛藤や大変さ、福祉の問題などが描かれている漫画です。2004年には、ドラマにもなった作品で、中学校までの生活が描かれ、全15巻と長いですが、漫画ですから、読破も無理なくできま

す。最初の1冊だけでも、「自閉症という障害は克服させるものではなくて、その特性を理解して上手に付き合っていくもの」ということが、よくわかると思います。図書館にもありますが、私のゼミ室にもあります。是非読んでみてください。

自然科学

どちらも正解です

『かけ算には順序があるのか』

高橋 誠（著）

出版社：岩波書店／出版年：2011年／ISBN：9784000295802



推薦者

後藤 俊一（ごとう しゅんいち） 札幌校 理数教育専攻／准教授

1人あたり2個ずつが3人で6個となる計算を式で表すとき、 $2 \times 3 = 6$ は正しいが $3 \times 2 = 6$ は誤りだとする説がある。著者によれば、1972年頃からたびたび繰り返されてきた〈論争〉であるらしい。

本書で著者は、先入観なしにさまざまな考え方や歴史的な背景まで紹介してくれています。あとは自分の頭でよく考えて判断してください。

和算から現代数学への道

『高木貞治とその時代 — 西欧近代の数学と日本 —』

高瀬 正仁（著）

出版社：東京大学出版会／出版年：2014年／ISBN：9784130613101



推薦者

後藤 俊一（ごとう しゅんいち） 札幌校 理数教育専攻／准教授

現代日本の算数・数学教育はどのようにスタートしたのか。江戸時代に各地で活躍していたという和算家たちは、西洋数学が採用されてしまった学校教育の中でどんな役割を果たし、消えて行ったのか。

高木貞治は世界に通用する研究をなした最初の日本人数学者でしたが、私は、彼が

どこからともなく突然現れたように思えて、歴史年表の中に位置付けられないもやもやした印象を持っていました。

本書では、著者の長年のフィールドワークによって明らかになってきた和算から現代数学への繋がりが詳しく述べられています。

もやもやした気持ちも少し解消されました。

「全然わからない」ことがわかる本

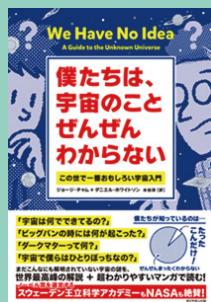
『僕たちは、宇宙のこと ぜんぜんわからない』

— この世で一番おもしろい宇宙入門 —

ジョージ・チャム、ダニエル・ホワイトソン（著）

水谷 淳（訳）

出版社：ダイヤモンド社／出版年：2018年／ISBN：9784478069547



推薦者

阿部 修（あべ おさむ） 理事・副学長／教授

毎年11月頃にノーベル賞受賞のニュースが流れ、宇宙のこと、身の回りの物質のことのほとんど全てのことが（少なくとも物理学者には）理解できたのではないかという気にさせられます。しかし、宇宙物理学者

を含めて私たち人類には、まだまだわからないことだらけであることを思い知らされる本です。決して難しい言葉を使わず、これから学ぶ人に勇気と希望を与える本です。

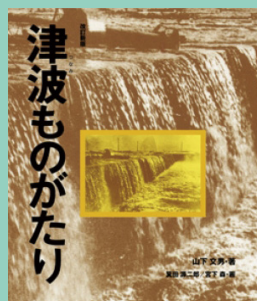
自分と家族、そして子どもの命を 津波から守るために

『改訂新版 津波ものがたり』

山下 文男（著）

箕田 源二郎、宮下 森（画）

出版社：童心社／出版年：2011年／ISBN：9784494019557



推薦者

田中 邦明（たなか くにあき） 函館校 地域教育専攻／教授

1990年に出版されてから休刊になっていた本ですが、東日本大震災をうけて復刊した児童向けの防災読み物です。著者自身が見聞した三陸地方の津波にまつわる物語を科学的なイラスト入りで分かりやすく解説したのですが、もしこの書物を読んでいたらどれだけ多くの人々が助かったかと悔やまれます。津波の大きさや海水面の変化はどれ一つとして同じものではなく、地震を感じなくとも大津波に襲われた

り、最初は小さくとも、第2波、第3波が最大となるような津波があるなど、津波への備えに万全はないことを痛感させられました。一人一人が津波の自然現象としての複雑さと恐ろしさを理解し、日頃から津波への心得をもつことの重要性が身にしみて認識されます。とりわけ、教員にとっては授業づくりに役立つだけでなく、子どもの命を預かる大人として必読の書物です。

植物の知られざる戦いの数々

『たたかう植物 —仁義なき生存戦略—』

稲垣 栄洋（著）

ちくま新書

出版社：筑摩書房／出版年：2015年／ISBN：9784480068408



推薦者

出口 哲久（でぐち てつひさ） 札幌校 生活創造教育専攻／講師

著者の稲垣先生は雑草学の専門家で、植物に関して多くの書籍を出版しています。私は稲垣先生の本を10冊以上読んでいますが、ピックアップする事例がいつも面白く、文章もわかりやすいです。その中でも植物の生存競争についてまとめた本書は、雑草を専門とする著者の得意分野であるためか、特に文章がさえわたっており、夢中になって読み進めてしまいました。

本の章立ても面白く、『第1ラウンド 植物vs植物、第2ラウンド 植物vs環境…』といった形で対戦相手ごとにまとめられています。ちなみに、最終章である第6ラウンドの対戦相手は我々人間です。

楽しく読み進めていくうちに、自然と植物への理解が深まっていくはずですよ。様々な校種・教科で植物を扱うことになりまので、教育大生に広くお勧めします。

暗記じゃない生物学がそこにある

— 謎解きの生物学

『虫はなぜガラス窓を歩けるのか?』

石井 象二郎 (文) つだ かつみ (絵)

出版社：偕成社／出版年：1993年／ISBN：9784036345304



推薦者

木村 賢一 (きむら けんいち) 札幌校 理数教育専攻／教授

サイエンスは、謎解きである。生きものには、不思議(ミステリー)がいっぱい。その謎を解き明かしていくのが生物学。決して暗記科目ではないのです。生きものの何が不思議なのか、またその謎をどのように解き明かしていくのか。生物学者たちは、失敗を繰り返しながらも、考えをめぐらし、実験・観察を工夫し、謎に迫っていく。本書は、身近な生きものである TENTUM シがガラス窓

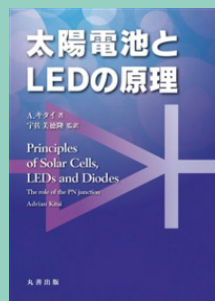
を平気で歩く姿をみて、ふと感じた「虫はなぜガラス窓を歩けるのか?」といった疑問について、ひとつひとつ実験を通して解き明かしていった探求の過程を綴った児童書です。児童書といって、侮ることなかれ(著者の石井象二郎先生は、もともと京大の昆虫の研究者)。そこには、本当の生物学があります。みなさんも一緒になって、その謎解きの過程を味わってみませんか。

環境を学ぶなら、ぜひこの一冊！

『太陽電池とLEDの原理』

Adrian Kitai（著） 宇佐美 徳隆（監訳）

出版社：丸善出版／出版年：2013年／ISBN：9784621086841



推薦者

松浦 俊彦（まつうら としひこ） 函館校 地域協働専攻／教授

地球温暖化対策や省電力社会の実現に有力な技術である太陽電池とLEDは、私たちの生活の中で身近になってきている。腕時計や電卓など太陽電池を使ったものを一つは持っているのではないだろうか。また、スマートフォンや信号機などLEDを使ったものは生活に欠かせなくなってきている。さて、みなさんは太陽電池が電気を

つくり、LEDが光るしくみを理解しているだろうか。実は、太陽電池もLEDも中身は半導体であり、その組み合わせによって、発光したり吸収したりするのだ。これを知らずして環境は語れない。太陽電池とLEDのしくみを理解して、未来の地球環境を語り合おう！

遺伝子組み換え作物は 本当に“悪”なのか？

『誤解だらけの 遺伝子組み換え作物』

小島 正美 (著)

出版社：エネルギーフォーラム／出版年：2015年
ISBN：9784885554551



推薦者

出口 哲久 (でぐち てつひさ) 札幌校 生活創造教育専攻／講師

「遺伝子組み換え作物」と聞くと多くの学生は拒否反応を示すのではないのでしょうか。報道等では否定的な意見をたくさん見てきたと思います。

しかし、遺伝子組み換えの技術が登場し、一部の作物で用いられるようになってから随分と時間がたっているのも事実です。これまでの科学的な検証で、遺伝子組み換え作物の利点と欠点はどのように整理されているのでしょうか。

本書は、新聞記者、大学教授、農家、バイオテクノロジー企業のCEOなど様々な

立場の人間からの、遺伝子組み換え作物に対する肯定的な寄稿を集めたものとなっています。

21世紀の人類にとって「著しい発展を示す科学技術とどのようにして付き合っていくのか」というテーマは非常に重要なものだと思います。さらに、近年は遺伝子編集という革新的な技術も注目を集めています。遺伝子組み換えについて、肯定的に考えている側の意見にも目を通し、考えてみることは今後につながると思います。

芸 術

日本におけるフルクサスとは？

『Japan Fluxus』

Luciana Galliano (著)

出版社：Lexington Books / 出版年：2018年

ISBN：9781498578257



推薦者

松永 加也子 (まつなが かやこ) 岩見沢校 音楽文化専攻／教授

1960年代初め、リトアニア出身のデザイナーで建築家のジョージ・マチューナスが提唱した前衛芸術運動であるフルクサス(ラテン語で、「流れる」「変化する」「下剤をかける」)は、その活動の幅は美術、音楽、詩、ダンスなど多岐に渡っており、今日も世界各地で公演が続けられている。日本では

オノ・ヨーコ、一柳慧、小杉武久、塩見允枝子らが初期の活動を牽引してきた。本書は、イタリア人で日本の現代音楽の研究者であるルチアナ・ガリアーノ氏によって書かれた、日本におけるフルクサス運動を再解釈する、極めて重要な一冊である。

子どもは大人の半分じゃない！

—子どもの絵の論理(ロゴス)を解き明かす—

『児童画のロゴス —身体性と視覚—』

鬼丸 吉弘 (著)

出版社：勤草書房／出版年：1981年／ISBN：9784326198474



推薦者

阿部 宏行 (あべ ひろゆき) 岩見沢校 美術文化専攻／教授

作者の鬼丸吉弘は、大正12年(1923年)上川郡東神楽村(現・旭川市)に生まれ、東北帝国大学(現・東北大学)を卒業後、北海道学芸大学(現・北海道教育大学)に就任し、1987年の退官まで、主に美学・美術史等で教鞭をとった。私もその薫陶を受けた一人である。

鬼丸は、美術教育に関する訳書の執筆を経て、『児童画のロゴス』を発行した。本の帯には「児童画とはカオスではなく一種の論理性を潜(ひそ)めた行為である」と書かれている。子どものかく絵を単なる「いたずら」とみなすのではなく、「ロゴス」として、論理的に語ることでできるものとして記述している。また副題にある「身体性と視覚」は、子どもの絵から大人の絵への発達を分ける鍵になっている。その発達を3期に分け、概ねかかれたものが、大人の目に、何を表し

ているのか分からない時期の「表出期」、かかれたものが大人の目にわかるようになるが、大人のかきかたと違っている「構成期」、そして、ほぼ大人とかきかたが同じような「再現期」としているので絵を指導する立場の人にとって参考になる。子どもの絵は、身体性に導かれた表出期や構成期を通り抜け、視覚が優位になる再現期に移行する発達の原理を説き、その原理を理解した上で指導することの大切さを説いている。我が国の指導について、「児童画に対する誤解や不明の大半は、すべて子供を目の基準で導こうとする」ことから生まれているとしている。子どもに関わる大人が自らの視覚優位の立場から本来大切にされるべき、子どもの「身体性の原理」を誤った方向に導き強制が続いていると断罪する。

音楽との向き合い方を変えてみませんか

『成功する音楽家の新習慣 — 練習・本番・身体の戦略的ガイド』

ジェラルド・クリックスタイン（著）

藤村 奈緒美（訳）

出版社：ヤマハミュージックメディア／出版年：2018年

ISBN：9784636943375



推薦者

服部 麻実（はっとり あさみ） 岩見沢校 音楽文化専攻／准教授

岩見沢校では音楽を専門的に学びたいという学生が沢山います。本書は、その中でも著者自身が演奏家、教育家としての知識を余すことなく、若い人に音楽家になるための助言を述べています。

日々の取り組みの中で、行き詰まりを感じたり、また教師との関係で悩むこともあるでしょう。自身の現状を十分に把握できずにイライラすることもあるでしょう。

そのような時に、本書には何か考えのヒントがあると思います。全部を通して読まなくても、まずは手に取って、自分の気になる項目から読んでほしいと思います。

何か、あなたの思考を変える、また広げる助けになるものと思います。

本書の言葉を以下に抜粋しました。何か心惹かれるとは思いませんか。

「才能はあなたの内なる可能性を表す、生涯にわたって吹き続ける風のようなものだ。創造性のスキル——とくに、本書で取り上げた練習、本番、自己管理のスキル——は、その風を受けて芸術という船を進める帆のようなものだ。

スキルをマスターしていけば帆はどんどん大きくなり、もっと多くの風をとらえ、さらにすばらしい成果を出せるようになる。

才能という風がそよ風であれ強風であれ、帆がなければ風は吹き去るばかりでどこにも連れて行ってはくれない。

(…) 道のりの途中では、勝利を収めることもあればつまづくこともあるだろう。

(…) それでも、やがて振り返ってみたときには、それまで歩んできた曲がりくねった道にもちゃんと意味があったことがわかるはずだ。」(本書より)

GoogleとAppleの街 サンフランシスコが誇る名門オーケストラの、 驚くべきマネジメントが明かされる！

『オーケストラは未来をつくる』

— マイケル・ティルソン・トーマスと
サンフランシスコ交響楽団の挑戦 —

潮 博恵（著）

出版社：アルテスパブリッシング／出版年：2012年
ISBN：9784903951591



推薦者

宇田川 耕一（うだがわ こういち）岩見沢校 芸術・スポーツビジネス専攻／教授

自らイノベーター（革新者）であると公言する指揮者マイケル・ティルソン・トーマス率いるサンフランシスコ交響楽団は、市民との連携を視野に入れ、閉鎖的ともいわれるクラシック音楽界に、常に新たな話題を提供し続けている。

SNSの導入や数々のユニークな教育プログラムなど、音楽・教育・経営など多角

的な視点からその戦略を徹底取材、ティルソン・トーマスをはじめ関係者にも丁寧にインタビューをし、その成功の秘密を明らかにしている。

クラシック音楽の世界にとどまらず、一般の企業組織や各種団体のマネジメントにも通じる実に魅力的な著作であり、ぜひ手に取って欲しい一冊である。

芸能とは何か、伝統とは何か

— 能と狂言の人間国宝二人の対話から知る —

『芸の心 — 能狂言 終わりになき道』

野村 四郎、山本 東次郎（著）

笠井 賢一（編）

出版社：藤原書店／出版年：2018年／ISBN：9784865781984



推薦者

中西 紗織（なかにし さおり） 釧路校 学校カリキュラム開発専攻／准教授

700年近い歴史を持つ能・狂言が現代まで伝えられ生きている、その根底にあるものは何か。芸能とは何か、伝統とは何か。傘寿を迎えた人間国宝の二人、観世流シテ方野村四郎氏と大蔵流狂言方山本東次郎氏の対話は、そのような問いへの答え以上の貴重な内容に溢れている。能・狂言を

観たことがなくても、長い年月の蓄積の中にある「教える・学ぶ」の方法、舞台表現の「知」、それを支える考え方、背景にある歴史などに触れてみたい人にもお薦めの一冊。編者笠井賢一氏による、大変わかりやすい能・狂言の歴史や舞台作品解説も記されている。

「稽古論」でもなく 「教育哲学」でもない、「稽古哲学」

『世阿弥の稽古哲学』

西平 直（著）

出版社：東京大学出版会／出版年：2009年／ISBN：9784130101134



推薦者

中西 紗織（なかにし さおり） 釧路校 学校カリキュラム開発専攻／准教授

教育、芸術、何かを表現することに少しでも関係のある人が読むと、教える・学ぶ・伝えるといったことに新たな発見があるだろう。本書は当初「世阿弥の伝書における稽古の言説に哲学的な検討を加える試み、あるいは、その稽古のダイナミズムを東洋哲学の理論的枠組みによって浮き彫りにし、〈無作為の作為・作為の無作為〉の交叉反転を読み解く試み」という長い副題を持っていたという。世阿弥が残した伝書の読み手として想定されているのは息子やその子孫たち、つまりごく限られたその道に生きる者たちである。しかしその内容は、能楽だけでなく広く芸術表現の世界で現代においてもなお生きて働くものであり、教育の観点から見ても多くの貴重な示唆に溢れている。

西平氏の言葉の選び方、文章の美しさや議論

の進め方にも感嘆するばかりである。例えば「身体ゼロ地点」、「音楽性」。音楽学・音楽教育学を専門とする私自身はこれまで、西平氏が書いたような意味で「音楽性」という言葉を使ったことがなかった。しかし「音楽性」という言葉ほど、世阿弥が書いたことを説明するのに相応しい概念はないだろう。本書を読んでいる最中私はずっと目からウロコが落ちっぱなしであった。そして、本書を読む上で（西平氏の著書や論文は多くがそうであるが）、註が非常に重要である。ここをじっくりゆっくり丹念に読んでいくと本書を読む意味が一層広く深くなる。世阿弥の伝書のように、繰り返し読むうちにジワジワといろいろなことを感じたり、益々わからなくなったりする楽しさを特に若い人たちに感じてほしいと思う。

Reading Well —教育大生に贈る本—

2019年3月25日発行

発行・編集 北海道教育大学附属図書館
札幌市北区あいの里5条3丁目1番6号

